

## 巻頭言

### —自然の恵みと脅威と看護—

基礎看護学 教授 大坪 みはる

本学が立地する淡路島は、「国生みの島」として古事記に登場し、また古来より「御食つ国」として天皇に食材を献上するなど自然豊かな島で、2016年4月に日本遺産に認定されました。現在も食料自給率100%超を誇っています。この恵まれた自然や文化を背景に、淡路島は自然の恵みを享受し、さらなる健康増進へ寄与する好条件を備えており、一昨年度から文部科学省の助成金を受けてブランディング事業「セラピーアイランド淡路島」を展開しています(詳細は関西看護医療大学紀要第10巻1号をご参照ください)。

3年目の実施計画は、1) 学外施設におけるモデルの実施と効果検証、2) 地域、老年、母性・助産、小児看護学などの実習の検討、3) 発掘・検証したセラピー資源の商品化に向けた協働企画開発組織の立ち上げ、4) サークル活動と効果検証の継続、経時的变化の明確化、5) 事業の内部評価および外部評価、あらたに開発されたセラピー商品開発の方向性の確認、6) 中間報告書作成を挙げており、効果検証結果については、紀要に掲載できる日も近く、またセラピー技術の習得は学生の実習をより豊かにするものと期待しています。

しかし一方で、阪神・淡路大震災(1995年1月17日)を経験した島でもあります。本学では、東日本大震災(2011年3月11日)の2年後から、学生と共に東北復興ボランティアを毎年実施しています。学生たちは現地で見聞きしたこと、学んだことを大学祭や学報を通じて学生や地域住民に伝達し、30年以内に80%の確率で発生が予測されている南海トラフ大地震に備えます。

2018年5月に淡路島で「第2回きぼうの桜サミット」が開催され、4年生が参加しました。この事業は東北4県の津波到達地点に宇宙を旅した巨大桜の種から植樹した桜並木を作ろうという壮大なプロジェクトです。同時に各地域の交流・絆を創生しようという未来に向けたメッセージです。このサミットでは東北の同じ地震・津波に襲われたにもかかわらず死傷者ゼロの地域がありました。それは事前の住民のつながりと過去の教訓、自らの役割の認知が住民全体に周知されていたことがその奇跡的な結果につながったということを学生たちは学びました。彼らが卒業後、看護師・保健師となったときに職場でこの教訓を生かした災害対策に取り組んでくれることでしょう。

テレビや防災無線で避難指示を流しても実際避難行動をとる人は少ないのが現状です。この個々人の認知が災害から身を守るか巻き込まれるかの岐路であるという教訓から、人の認知と行動の研究が災害から命を守るキーポイントであるともいえます。看護学は「人間の反応」に対応する学問であり、健康と暮らしを守るために自然の恵みをいかに健康に役立てるか、自然の脅威に対していかに命や健康を守るか、淡路島発看護研究が紀要の紙面を埋める日を期待しています。